

「なぜなぜ期」をもう一度

教育企画推進部 副部長 勝野 啓

「なぜなぜ期」とは、2～6歳の子どもが身近なことにに関して「なんで？」や「どうして？」と質問してくる時期のことを指します。「なんで空は青いの？」や「どうして毎日歯を磨くの？」など、親に聞いたことがある人もいるかもしれません。なぜなぜ期は、あらゆることに対して質問を繰り返すため、大人にとってはうんざりしてしまうこともあります。子どもにとっては、知的好奇心や学習意欲を伸ばすために非常に重要な時期と考えられています。

2022年に京都大学で行われた講演（講演者：酒井敏）の中で、次のような話がありました。～研究は、「役に立つ」がスタートになると、なかなか新しい発見が生まれません。面白くない。だから、役に立たないけれどもあったら面白いもの、あったら楽しいもの、そういうものが探究のスタートになってもいい。新しい発見は、だいたい常識の外にある。だから、はじめは周りから「また、あほなことをして…」と言われてしまうかもしれないが、それでもまじめにあほなことを研究する。まじめにやってみて、100個くらいやると、1個あたるともしれない。それが研究になっていく。人に評価されようとしていたら、研究なんかできない。～

社会はカオスで予測不可能であり、みんなはそんな社会に飛び出していきます。社会に出るということは、社会の課題や家族の課題、個人の課題など、さまざまな課題を解決していくことです。その中で、解決するとお金になる課題は、すでに「研究のプロ」がお金をもらって（投資をしても）やっています。だから高校生は、基本的にお金にならない課題を見つけるしかありません。そうすると、世間的には『あほなこと』と言

われることにチャレンジすることが大切になってきます。お金になる研究は、基本的に役に立つ研究なので、『役に立つ』をテーマ選びのスタートにすると難しいのです。だからこそ、『あほなこと』を探究活動のテーマに選んでみてはどうでしょうか。

多くの人は、賢くなると間違いを犯すことを恐れるようになります。今までに学んだ知識や与えられた言葉から、「こうあるべきだ」「こうすべきだ」という枠に囚われるようになります。小さな時に考えていた素朴な疑問を言葉に出すことは、恥ずかしいことだと感じてしまうかもしれません。小さな頃に経験した、「なぜ？」に対して大人が困っている様子を見て、大人を困らせたらだめだと思ってしまうかもしれません。そして、「なぜ？」を投げかけること、ひいては、「なぜ？」と思うことすらやめてしまうかも…

しかし、探究活動は、「なぜ？」と疑問を持つことから始まります。忘れてしまったかもしれませんが、確かに過去にあった「なぜなぜ期」をもう一度始めてみてはどうでしょうか。

*酒井敏（さかいさとし）現在、静岡県立大学副学長。京都大学大学院人間・環境学研究科教授などを歴任。

探究授業の記録・報告

5月20日（月）2～3時間目

1年一般・類型「理数探究基礎（探究入門）」

特別講義

「明瞭性（intelligibility）の高い発音とは」

関西大学 名誉教授 山根 繁先生（高24回）

「英語学習の指針を見つけること」「世界に目を向けるきっかけとすること」を目的に、例年1年生の1学期中間考査中に特別講義を実施しています。今年度は本校OBでもある関西大学名誉教授の山根先生から英語の発音について講義を受

けました。

日本人の話す英語の特徴を踏まえながら、相手に伝わる英語を話すのに必要な要素と、それを鍛える方法について具体例を交えながら講義いただきました。英語というものを学習対象から発信のツールに、そして研究の対象にするという視点も得ることができました。



<生徒の感想より>

・英語が伝わらない要因の最も大きいものが発音であることに驚いた。文法やフレーズ、言い回しに目が行きがちだが、実際に話して（発声して）伝えるときに、単語だけでも相手に伝えられるようにすることが大切だと知った。

・日本人の発音の特徴を理解して、ネイティブの人の音声と聞き比べてみようと思った。そこから、自分の発音の悪いところを理解して、修正し、だれが聞いても混乱しないはっきりとした発音にしていきたいと思った。

・カタカナ英語の特徴が自分の発音に当てはまる所もあったので、授業や家庭学習で音読したり、英語を話したりするときには、アクセントや速度、子音、母音などを今までよりも意識して取り組むようにしたい。また日常的に洋楽を聞くなど英語に触れる機会を増やしていきたいと思う。

5月1日（水）5~6時間目

2年類型「探究B」探究構想発表会

指導助言：

神戸大学 名誉教授 播磨 尚朝先生

神戸大学 教授 伊藤 真之先生

各班の課題研究テーマと構想について発表を行いました。コメントシートへの記入を行い、相互に質問・意見を共有しました。発表の終了後には先生方からグループごとにフィードバックを

行いました。

それぞれの班で浮き彫りになった課題については、翌週5月8日（水）の探究Bの時間に検討していききました。



<活動ログより抜粋>

・他の班の発表を聞いて、評価シートにコメントを書くことで、自分達の探究も客観的に見られるようになり、冷静に問題点や改善点をまとめることができた。播磨先生からの講評で、新しい蓄熱素材の模索は企業がある程度やっていること、それがどんな素材かは企業秘密であるため調べても出てこないことを知ることができた。また、伊藤先生の、誰もやっていないことに価値を見出すか、誰かがやったことでもそのプロセスを再現することに価値を見出すか、というのは個人の自由である、という話は新しい考え方だった。班員で話をすると、やはり自分達は、今までに誰もやったことのないことを探究したいという結論に達した。

・自分達の探究は自分達にしかできないことなのか、自分達だから深めることができるようなものなのか、と聞かれると即答できないというのが正直なところだった。そのため、今のテーマで決定するのはかなり厳しく、同じ分野でも全く違う分野でもテーマを見直す必要があると感じた。ただ、今までも様々な分野やテーマを考えてきたが、自分としてはどのテーマにもかなりの熱量があったように思う。6月のテーマ決定に向けて、班員全員が同じくらい大きい熱量を持てるようなテーマを、1ヶ月かけて再構築をしていきたいと考えた。また、伊藤先生の話で、柔軟性を持ってテーマの軌道修正や再構築をすることが大切だという話があった。自分達の班は、柔軟性はあるが、逆に「テーマ決定においてここだけは譲れない」というこだわりは少ないので、何にこだわるのか

を明確にしたうえで柔軟に対応していきたい。

4月30日(火)・5月7日(火) 5~6時間目

2年一般「総合的な探究の時間」

各班で構想している探究テーマについて、担当の先生からヒアリングを行いました。このヒアリングは、担当の先生をローテーションすることで数回設けています。いろいろな意見や指摘を吸収して、よりよい探究テーマを目指していきます。



<活動ログより抜粋>

・行き詰まり始めています。このテーマでは障害が多すぎる上あっさり終わりそうです。テーマを変えた方がいい気もしますが、ものすごい方向転換案しか思いつかず、初めに同じテーマについて考えている者同士で集まった意味がなくなってしまう。探究とは難しいものです。

・説明は聞いても、いざアンケートを作るとなるとどうすれば効果的なのかを考えるのが難しかった。

・テーマが大丈夫なのか不安、結果の想定があまりできない。

・先行研究を読破するのに、毎回くじけてしまいます。

<現在取り組もうと考えているテーマの抜粋>

・小学校国語教材から見る、記憶に残りやすい暗記法

・キャラの言葉遣いの観点から見る、外国人の日本語教育にふさわしいアニメは何か

・2次元に推しができる人と3次元に推しができる人との心理の違い

・単語などを記憶する時に、人数や記憶の仕方によって記憶量がどう変わるか

・地球温暖化の原因や地球温暖化が私たちに及ぼす影響

・書く時の色が記憶の定着に与える影響

・ティッシュボックスの一枚目を快適に取り出すためにはティッシュボックスをどう改良したら良いのか

・音楽とスポーツパフォーマンスの関係

・普段着る服と好きな服にどのような違いがあるのか

・M1のボケ数と順位の相関関係を調べて、コミュニケーションについて考察する。

・今までに日本で流行ったアイドルを社会情勢と結びつけながら研究する。最終的には次に流行るアイドルをプロデュースする。

その他の活動報告

SSH 台湾研修 事前指導

5月22日(水) 事前指導④

人と防災未来センター・兵庫県立大学大学院

減災復興政策研究科 研究室訪問

(青田良介教授・平井 敬准教授)

SSH 台湾研修では日本と台湾の比較という観点から「減災復興学」の視点を取り入れた探究活動をすすめて、共同研究に発展させ、成果を羅東高級中学校で発信します。その事前学習として、「阪神・淡路大震災について認識を深め、防災を科学的に考える機会とする」ために人と防災未来センターを訪問しました。

センター内では複数の動画資料から、震災の被害の実情とその伝承について考えました。近年整備された「BOSAIサイエンスフィールド」では、多様な災害からどう身を守るかを実際に体験しながら学び、探究の切り口とすることができました。

見学後は減災復興政策研究科に移動し、減災復興学の概要と日台関係の実情について講義を受け、各自の探究について指導を受けました。大学院生の方にも複数参加してもらい、様々な視点から探究テーマについて議論を重ねました。



<活動ログより抜粋>

・被災地が復興していく時間は、次の災害へのカウントダウンという言葉がすごく印象的だった。一見すごく残酷な言葉のようにも聞こえるが、復興していく過程が次の災害への予防になるという考え方は、地域の持続可能性を秘めていると思うし、そういう意味で減災復興学の果たす役割の大きさを痛感した。

・講義を受けて、まずグループ間のコミュニケーションが円滑でないと痛感した。また、台湾と比較するのに台湾の事情についての調査がまだ至らぬ状態であるのが1番の課題だと思う。台湾はコミュニティでの防災に対する取り組みが強い、即断即決の気色があるということが発見である。

人文・数理探究類型

英語ポスターセッションのお知らせ

日時：令和6年6月15日（土）

10：00～12：40

場所：本校3階 HR 教室、講堂

講師：Mr. Joaquin Lopez (長田高校)

Ms. Denise Ortega (神戸高校)

Ms. Johnson-Cavanaugh Bailey

Mr. Barone Grant (いずれも加古川東高校)

植松啓 先生 (研究ラボ主宰)

川崎志慧先生

(株式会社ハッスバ イノベーション研究員)

内容：

・人文・数理探究類型3年生が探究の成果を、ポスターを用いて英語で発表した後、質疑応答を行います。

<発表時間と方法>

グループ発表の部 発表5分、質疑応答・助言10分、移動5分（合計20分）

個人発表の部 発表5分、質疑応答・助言5分、移動5分（合計15分）、合計7回のローテーション。

<指導助言>

本校 ALT を含む英語話者が、発表内容についての質問と英語のデリバリー面での助言と講評を行います。

※類型生徒は3学年とも全員参加ですが、一般クラスの皆さんも探究の参考になると思いますので、ぜひ自由に発表を覗いてみてください！

編集後記

文化祭をはじめとして行事の多い期間が続きましたが、2年生は探究テーマを深めていく重要な期間だったように思います。また、3年生はどのようにそれを発信していくか準備を進める時間でもありました。1年生も、特別講義を通して自分たちの学びを深めていく時期ではなかったでしょうか。

「夏休みが勝負」とは受験勉強の文脈でよく言われることですが、これは探究活動や、海外での国際交流活動にも同じことがいえると思います。それまでの充実した準備が大切なのは言うまでもないことでしょう。実りある活動を迎えられるよう、私たち教員も全力でサポートしていきます。この誌面でも続々紹介していきます。楽しみにしてください。

タイトル決定！

タイトルを“Curiosity (好奇心)”としました。1年生 Y さんのアイデアです。意見を寄せてくれた皆さんありがとうございました！！